

令和 3 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2018～2020
 課題番号：18K02048
 研究課題名(和文) アルフレッド・シュッツ文庫を利用したシュッツの社会理論とその影響に関する研究

研究課題名(英文) The Theoretical and Empirical Research on the Social Theory of A. Schutz and its Influences for the Following Social Scientific Activities with Reference to the Alfred Schutz Archive

研究代表者

那須 壽 (Nasu, Hisashi)

早稲田大学・文学大学院・名誉教授

研究者番号：40126438

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、早稲田大学文学部社会学研究室に設置されている「アルフレッド・シュッツ文庫」所蔵の資料・設備を主として用い、A. シュッツの社会理論の形成・展開について、ならびに彼の社会理論の後続の学術研究への影響について、理論的・実証的な検討を行なった。具体的には、未公開のシュッツの草稿やメモなども参照しつつ、シュッツ自身の社会理論の形成と展開に関する内在的な検討、彼の議論の影響を受けて展開されてきた研究の動向に関する調査・検討、という二つの課題に取り組んだ。これらの課題に同時に取り組むことを通じて、シュッツの社会理論を体系的に再構築することを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

シュッツの草稿やメモなどの未刊の資料を含む関連資料を検討し、彼の遺した研究の断片を紡ぎ関連付ける作業を通して、シュッツ自身は体系的には論じなかった彼の知の理論の構想を浮かび上がらせ、新たな知の社会学の可能性を拓いた。また、各国の研究者の協力を得て、社会学にとどまらず様々な学問領域に目配せしながら、シュッツ理論と現象学的社会学に関する世界中の二次文献の情報の収集・整理を行った。これらの資料を精査する作業を通して、彼の議論の影響を受けた今日の研究の動向を明らかにした。今回収集した二次文献の情報については、シュッツ理論と現象学的社会学の研究に資するべく、シュッツ文庫ホームページ上で公開している。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we have investigated how the social theory of A. Schutz was formed and developed, and also the effects of his theory on succeeding researchers in different disciplines, using and analyzing the materials in 'The Alfred Schutz Archive Established in the Memory of Alfred and Ilse Schutz' at Waseda University. First, with reference to Schutz's unpublished drafts and memoranda, which are posited at Schutz Archive, we have theoretically examined the processes of formation and development of his social theory. Second, searching for and collecting volumes and papers not only from Japan but also all over the world, which refer to and are based on Schutz's work, with collaboration from German and Argentine scholar groups, we have researched the trends of the studies influenced by Schutz's theory. Coping with these two topics at the same time, we have tried to systematically reconstruct Schutz's social theory.

研究分野：アルフレッド・シュッツに代表される現象学的社会学に基づいた理論社会学ならびに社会科学方法論

キーワード：アルフレッド・シュッツ 現象学的社会学 社会科学方法論 知の社会学 レリヴァンス

1. 研究開始当初の背景

現象学的社会学の祖であるアルフレッド・シュッツがこの世を去って半世紀以上が過ぎたが、その間にも多くの研究が蓄積され続け、2012年における国際シュッツ・サークル(The International Alfred Schutz Circle for Phenomenology and Interpretive Social Sciences)の設立に象徴されるように、今日、シュッツの理論に関する関心が再び国際的にも高まってきている。しかしその一方、シュッツと直接的な交流のあった論者たち(T. ルックマン、P. バーガー、H. ケルナー、F. カースティン、L. エンブリーら)が相次いでこの世を去るなど、シュッツとシュッツ理論に関する貴重な証言が失われ始めてもいる。こうした状況にあつて、早稲田大学文学部社会学研究室に設置されている「アルフレッド・シュッツ文庫(The Alfred Schutz Archive Established in the Memory of Alfred and Ilse Schutz)」(以下、「シュッツ文庫」と略記)のようなアーカイブの必要性・重要性は、今日、以前にもまして高まってきている。こうした問題関心から、シュッツ文庫に保管されている資料の整理・分類等を開始し、その過程で、本研究の問いの着想を得た。

2. 研究の目的

本研究の目的は、A. シュッツの社会理論の形成・展開について、ならびに彼の社会理論の後続の学術研究への影響について、理論的・実証的な検討を行なうことにある。具体的には、(1)未公開のシュッツの草稿やメモなども参照しながら行われる、シュッツ自身の社会理論の形成と展開に関する内在的な検討、(2)シュッツの議論の影響を受けて展開されてきた、また展開されつつある研究の動向に関する調査・検討、という二つの課題に取り組む。

(1)第一の問いは、広く認知・言及されながら未解明の部分が多いシュッツ理論の内容に関する問いである。具体的には、彼の知の理論(それは彼にとっての社会学の在り方そのものにかかわるとされる)の根幹をなす「レリヴァンス」概念や、彼の行為論の基礎をなす「時間」「空間」概念の位置付けといった論点を取り上げる。

(2)今日、シュッツ理論は、社会学と哲学の領域は言うに及ばず、教育学、政治学、心理学、人類学、さらには考古学、地理学といった領域にも影響を与え続けている。しかし、シュッツ理論に影響を受けたその後の学的展開に関する研究は、部分的には行われているものの、いまだ網羅的には行われていない。とりわけ、社会学以外の領域への影響に関する調査・検討についてはほとんど手つかずの状態である。第二の問いは、シュッツの著作・論考はもとより、それに関する二次的な文献等の調査を踏まえながら、シュッツの研究が社会学、さらにはさまざまな学問領域に与えてきた影響を明らかにすることである。

A. シュッツの思索に内在する研究とその思索がもたらした影響についての研究を同時に扱い、以上の二つの問いに答えることで、シュッツの社会理論に関する体系的な検討を行なうことを目指す。

3. 研究の方法

シュッツは彼の知の理論の根幹をなす「時間」「空間」「レリヴァンス」について、その重要性を度々指摘してはいたものの、その体系的な研究を残していない。そのため、第一の問いに答えるためには、シュッツの既刊の資料だけでなく、未刊の資料にも目を配り、彼の知の理論を体系的に構築する必要がある。本研究では、シュッツ文庫に所蔵されている一次資料、具体的には、未公開のものを多く含むシュッツの遺稿、蔵書への書き込み、同時代の論者たちと交わした書簡等を用いて、シュッツの知の理論の全体像を把握することを目指した。これらの資料の多くはマイクロフィルムで保存されているため、資料利用の度に資料が汚損・劣化する危険性があるということ、また専用の投影機がなければ内容を確認できないという難点を抱えていた。そこで、貴重な資料の保存という観点から、また利便性の向上という観点から、これらの資料を電子化した後、その内容の検討に取り組んだ。

シュッツの理論は、今や社会学だけでなく、さまざまな学問領域に影響を与えている。それゆえ、彼の理論の影響を受けたさまざまな学問領域における研究資料の情報を収集・整理することなしに、第二の問いに答えることはできない。本研究では、シュッツ理論に関心を寄せる各国の研究者たちに協力を依頼し、シュッツ理論に関する二次研究の情報の収集・整理を行った。かねてからシュッツ理論に高い関心を寄せていた北米、西欧の二次文献については言うまでもなく、加えて、プエノスアイレス大学のC. ベルベデー教授とそのグループならびにコンスタンツ大学のJ. ドレーアー博士とそのグループの協力を得て、これまで目配りが手薄であった南米、南欧(スペイン語圏、ポルトガル語圏、イタリア語圏)ならびに北欧、東欧の二次資料についても収集し、これらの資料をすべて年代ごとにリスト化した。これらの資料を調査することで、シュッツの理論が多種多様なネットワークを介して伝播し、今日の学的状況にいかなる影響を与えているのかを明らかにすることを試みた。なお、収集した二次資料に関する情報はシュッツ文庫のホームページ上で公開している。

4. 研究成果

(1) シュッツ理論の内在的検討

従来、知の社会学 (sociology of knowledge) の名のもとに論じられてきたのは、K. マンハイムに代表されるような、知を「存在拘束性」によって特徴づけ、そうした知を社会集団という存在に帰属させ、理解しようという試みであった。これに対し、シュッツは、知の「存在拘束」的な性格に言及しつつもそれにとどまらず、別の位相に着目し、新たな知の社会学を構想していた。彼は、知を社会集団に帰属させる従来の方法を転換し、存在を知へと帰属させるという観点から知の社会学を再構成することを目指していた。そのとき、「知」そのものを自明視してしまえば、従来の知識社会学を単に反転させたにすぎないことになる。「知」そのものへの問い、すなわち知が知として立ち現れるのはいかにしてかという問いこそが、シュッツの知の社会学にとっては不可避の問いなのである。

シュッツの知の社会学において「知」を理解するためには、「知」のもつ「不知」の側面を理解しなければならない。シュッツにとって「知」とはまさしくレリヴァンス現象であり、つねにレリヴァンスに規定されたものでしかありえない。それゆえ、「知」はつねに「不知」の側面を伴った「不完全なもの」である。この不完全性は、時間的あるいは空間的な隔たり等によってもたらされる暫定的・状況依存的な不完全性とは異なり、「知」がレリヴァンス現象である以上、「知」につねに伴う本質必然的な性格である。

以上の観点から構想される知の社会学は、「知」を社会的に分析しようとする試みであると同時に、社会学を「知」という視座から再構成しようとする転換の試みであるともいえよう。

(2) シュッツ理論に関する二次研究の動向

国内の研究動向

シュッツおよび現象学的社会学関連の国内の文献の件数の変遷を明らかにした(図1)。日本において最初にシュッツへの言及があったのは 菅見の限り 1950年の文献(青山秀夫『マックス・ウェーバーの社会理論』)においてであり、そのおよそ20年後の1969年にシュッツに関する2件の研究論文が発表された。その次にシュッツ関連文献が出版されたのは1973年であるが、同年以降は毎年1件以上の出版があった。1977年以降は毎年10件以上発表されており、1982年にかけては概ね増加傾向にあった。その後は各年20件から30件ほどで推移し、1997年には最大値となる39件の文献が出版された。1998年以降は概ね減少傾向にあり、2000年に30件を記録して以降、2001年から2006年までは約20件前後、2007年から2019年までは10件前後を推移していた。また、1973年から2020年にかけての3区間(3年間)の移動平均に着目すると、1980年代前半までの増加傾向、1980年代から2000年代前半までの横ばい傾向、2000年代から2010年代後半にかけての緩やかな減少傾向、2015年以降の再増加傾向という4つのトレンドがあることが明らかになった。

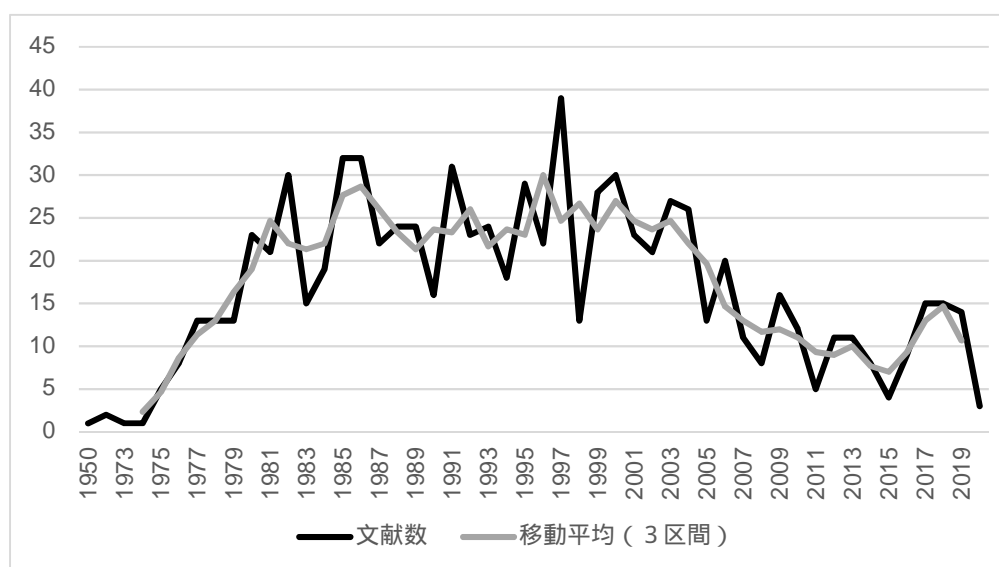


図1 「A. シュッツ」および「現象学的社会学」関連の国内の文献数の推移

1980年代前半までは、日本の学界、とりわけ社会学の議論のなかにシュッツの理論が導入された時期に当たる。この時期に目立つのは「アメリカの社会学」や「ウェーバー」という語である。第一に、海外の研究動向を紹介する文脈でシュッツへの言及があったこと、また、M. ウェーバ一流の理解社会学を批判的に継承した議論としてシュッツ理論に着目し、その意義を紐解く研究が見られる。それ以外にも、「役割」や「物象化」「知識社会学」といった社会学における

既存の議論にシュッツ理論を接続する議論が散見される。加えて、シュッツが用いている「意味」「合理性」「匿名性」といった個別の概念を社会学的研究に応用する議論も散見される。

1980年代前半から2000年代前半までにかけては、シュッツ理論に関連する文献がコンスタントに出版されるようになった。この時期は、シュッツ理論それ自体が備えている独自の意義・性格を明らかにする研究が散見される。例えば、「生活世界」や「多元的現実論」「レリヴァンス論」といった、シュッツ独自の概念や根本的な考え方を明らかにする文献が多い。また、この時期には「エスノメソドロジー」や「G.H. ミード」といったシュッツ理論と比較的近いとされる理論的立場、あるいは「フッサール」等の現象学者への言及も多く見られ、それらの視角との対比によって、あるいはそれらとの関連のもとで、シュッツ理論の「現象学的な」性格を浮き彫りにする研究が現われている。また、1997年前後には、博士論文や単著の書籍が出版されるなど、各研究者の視角からシュッツ理論の「全体像」を析出しようと試みる文献が現われている。

2000年代前半から2010年代後半にかけては、シュッツ関連文献の出版数が減少し始めた。この時期には、シュッツ理論を経験的かつ具体的なトピックに応用しようとする研究が見られる。社会学においては、従来の個別領域での研究を反省的に捉え直したり、そのなかに新たな問題を析出したりする研究が現われた。また、医療や看護等の社会学以外の分野でもシュッツ理論を応用する研究が見られるようになった。加えて、理論的な研究においても、より細分化したトピック、例えばシュッツの「時間論」「よそ者論」「音楽論」といった個別の議論に焦点化した研究が現われている。

2016年以降は、再びシュッツ関連文献の出版数が増加している。この時期は、第三期の傾向が概ね継続しており、シュッツ理論の根本的な考え方やシュッツによる個別の議論を応用する研究が出版されている。ただし、理論的な研究では、シュッツ理論を「科学論」として読む研究や、数理社会的・ゲーム理論的に解釈する研究といった、これまでとは異なる角度からシュッツ理論の性格を浮き彫りにしようとする試みが現われている。また、シュッツ自身が論点を提示するにとどまり、十分に論じることのなかった問題を理論内在的に論じる研究や、シュッツ理論が備えている原理論的な性格を徹底させた理論的研究も現われている。

国内外の研究動向

シュッツおよび現象学的社会学関連の国内外の文献の件数の変遷を明らかにした(図2)。シュッツに言及する文献が初めて刊行されたのは1932年であった。この年には、シュッツが存命のうち唯一出版された彼の著作『社会的世界の意味構成』(原題: *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*) が刊行され、この本についての書評がF. ボルケナウとF. カウフマンによって書かれている。書評以外では、翌1933年のH. ナイトによる「ドイツにおける哲学」が、シュッツに言及した初めての刊行物である。その後、1930年代から50年代半ばにかけては、シュッツ理論に関する文献数は各年1件程度で推移している。1950年代後半からは徐々に増加し、1970年代以降は件数が急激に増加している。その後、1985年の81件を最大値に、1980年代後半からは減少傾向に傾くが、2003年から再び増加傾向に転じる。2008年からは再び減少傾向にあったが、2018年には77件と過去三番目に多い件数を示した。また、1932年から2019年にかけての3区間(3年間)の移動平均に着目すると、1950年代半ばまでの横ばい傾向、1950年代後半から1980年代半ばまでの増加傾向、1980年代後半から2000年代初頭までの減少傾向、2003年から2007年までの増加傾向、2008年から2017年までの減少傾向、2018年以降の増加傾向というトレンドが見えてきた。



図2 「A. シュッツ」および「現象学的社会学」関連の国内外の文献数の推移

1930年代から1950年代半ばにかけての時期は、シュッツの名が徐々に広まっていった時期といえる。1932年に彼自身の著書が出版されて以降、シュッツに関する研究が現れはじめた。とはいえ、シュッツに関する刊行物はまだそれほど多くは見られず、各年1件ほどであった。また、これらの文献はいずれも英語あるいはドイツ語のものに限られており、この時期のシュッツ理論に関する研究が量的にも地域的にも限定的なものであったことがわかる。このことは、彼の著作『社会的世界の意味構成』が刊行された1932年から1934年に書かれたこの著作についての書評論文が、いずれもドイツ語で書かれたものであったことから窺える。1930年代後半になると、次第に英語での刊行物が増加し、シュッツ理論への関心がドイツ語圏から英語圏へと移行したと推測される。この時期には、シュッツの理論を社会科学方法論の文脈で論じている研究が現れ始める。1950年代に入ると、現象学的な知見を社会科学に接合しようとする試みが登場する。この時期になると、「行為」「意味領域」といったシュッツ理論の鍵概念に関する内在的研究が見られるようになる。

1950年代後半から1980年代半ばにかけての時期は、T. ルックマン、P. バーガー、G. サーサーといった、シュッツの影響を直接・間接に受けた、言うならば「第二世代」の研究者たちが活躍し、シュッツの理論がアメリカの社会学界、哲学界および社会科学界に普及し、浸透していった時期である。また、1962年にシュッツに関するフランス語でののはじめての刊行物が出版されたのをはじめ、1973年にはイタリア語、1977年にはスペイン語、1979年にはオランダ語とポーランド語、1981年にはポルトガル語と、シュッツに関する研究が各言語で次々と出版され、シュッツ理論に関心を寄せる研究者がアメリカだけでなく世界各地で現れてきたと考えられる。この時期には、哲学、とりわけ現象学の知見を社会(科)学に援用しようとする試みが多く見られるようになる。特に、「理解」「解釈」といった社会科学方法論を哲学的に基礎づけることへの関心の高さが窺える。関連して、「行為」「生活世界」「多元的現実論」といったシュッツ理論の鍵概念を主題とする研究も数多く見られ、シュッツ理論の内在的研究が盛んに行われていたことがわかる。1960年代後半からは、シュッツの理論を吸収し独自に発展させた、構築主義的社会学やエスノメソドロジーに関する研究も登場してきた。1970年代後半に入ると、T. パーソンズと対比するかたちでシュッツに言及する研究が徐々に増えてきた。

1980年代後半から2000年代初頭にかけての時期は、シュッツの理論を社会学以外の分野へと応用しようとする関心が高まった時期であるといえる。具体的には、教育(学)や経済学、文学といった分野へと応用しようとする試みが増加した。また、シュッツ理論の内在的検討は引き続き行われていたが、ただし第二期とは異なり、「他者」「動機」「主観性」「合理性」といった概念が主題として論じられることが多くなった。

2003年から2007年にかけての時期は、シュッツ理論の理論内在的な研究から、経験的かつ具体的なトピックへの応用へと関心が移行していった時期であるといえる。この時期には、シュッツの概念そのものの彫琢を試みる研究が減少した一方で、シュッツの理論を医療、ケア、グローバル化、メディア、テクノロジー、個人化、消費といったトピックと関連付けて論じている研究が急激に増加した。また、シュッツの鍵概念に注目すると、相変わらず「他者」が重要なトピックであるが、それを理論内在的に論じようとする試みよりも、「差別」「よそ者」「(異)文化」「宗教」といった文脈で論じようという試みが多くなっており、このことから理論的研究から経験的かつ具体的なトピックの応用研究へと関心が移行したことが窺える。

2008年から2017年にかけての時期は、シュッツ理論に関する理論的研究への関心が再び高まった時期であるといえる。第二期や第三期とは異なり、「時間」「空間」「レリヴァンス」「現実」といった、シュッツ理論の鍵概念のなかでもとりわけ基層に位置づけられる概念の彫琢を試みる研究が登場した。また、この時期には解釈学との関連性について論じている研究も増加している。加えて、シュッツ理論を音楽、ジェンダー、倫理(学)といったトピックへと応用しようとする研究が現れ、第四期に引き続き応用研究も盛んに行われていたことがわかる。

2018年以降は、シュッツ自身への言及もさることながら、T. ルックマンやL. エンブリーといったいわゆる「第二世代」への言及が増加した、言うならばシュッツ理論の「応用の応用」が盛んになった時期といえる。この時期には、「生活世界」「間主観性」「われわれ関係」といったシュッツの概念の再考を試みる研究が登場すると同時に、「ヴァーチャル・リアリティ」「デジタル」「テクノロジー」といった新たなトピックへの応用研究も増加した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 柿沼 涼平	4. 巻 60
2. 論文標題 A. シュッツにおける「主観的意味」と「客観的意味」：責任現象の社会学をめざして	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会学年誌	6. 最初と最後の頁 73～88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nasu Hisashi	4. 巻 43(3)
2. 論文標題 George Psathas and His Contributions to a “ Phenomenological Sociology ” Movement	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Human Studies	6. 最初と最後の頁 321～336
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10746-020-09542-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 那須 壽
2. 発表標題 George Psathas and his Contribution to the ‘ Phenomenological Sociology ’ Movement
3. 学会等名 Society for Phenomenology and the Human Sciences（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 草柳 千早
2. 発表標題 The Development of Phenomenological Sociology in Japan
3. 学会等名 Society for Phenomenology and the Human Sciences（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 栗原 亘、関水 徹平、大黒屋 貴稔	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 360
3. 書名 知の社会学の可能性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

アルフレッド・シュッツ文庫・早稲田大学 http://www.waseda.jp/Schutz/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	草柳 千早 (Kusayanagi Chihaya) (40245361)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ドレーアー ヨッヘン (Dreher Jochen)	コンスタンツ大学(ドイツ)・社会科学文庫・管理責任者	
研究協力者	ベルベデーレ カルロス (Belvedere Carlos)	ブエノスアイレス大学(アルゼンチン)・教授	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	柿沼 涼平 (Kakinuma Ryohei)		元早稲田大学大学院生
研究協力者	三津田 悠 (Mitsuda Yu)		早稲田大学文学研究科博士後期課程

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
アルゼンチン	ブエノスアイレス大学			
ドイツ	コンスタンツ大学（社会科学文庫）			